

の名を傳へられて居つたのではないかと思はれるものがある。先づ Kamil について考へて見ると、西域圖志^{卷九}疆域二、哈密の條に、此の地が古の伊吾に當るのに、然も兩者の音の相類しないのに就いて説を爲し、哈密といふのは史記大宛傳や、前漢書西域傳に見える扞采の轉音であるとし、扞采は于闐の東に接する地で、兩者の位置は相合しないが、これは扞采國の人が曾て哈密の地に居り、こゝから西して于闐に近い處に遷つたが爲であらうと論じてある。この説従ふべくば哈密の名は既に西紀前時代から知られて居ることになるが、然しこれは同書が引いた御製哈薩克使臣令隨圍獵詞跋に見える説を紹述したに過ぎず、そして此の詩跋に謂ふ所が單なる一片の想像で、何等の根據を有するものでないことは説くまでもないことである。

元和郡縣志^{卷四} 隴右道伊州即ち後の哈密の條に其の管下の納職縣を記し、伊州との距離を東北百二十里とし、ついで「俱密山在縣北百四十里」と記してある。この俱密 ku-mit の俱は唐代音譯の例を求めると Khodjend, Khu-djend (俱戰提) の kho, khu また kulun nor (俱輪泊) の ku また kosa (俱舍) の ko の如く、kho, khu, ku, ko 等の音を寫すに用ゐられて居るから、俱密は Kumil, Komil もしくはこれに近い Komul, Kumul 等、即ち前記の如く Kamil の別稱に當る音を寫したものと見ることが出来る。伊州の近傍にかゝる名を有する山が既に唐代から知られて居つたことを考へると、唐では此の地を從來からの稱呼に因んで伊州といふたが、其の地方のトルコ族などは既に Kamil, Kamul の如き名でこれと呼んで居つたのでなからうかと考へても、強ち無理ではあるまい。

辛卯侍行記^{卷六} 六 卷 六 を見ると

稽古者以哈密爲漢伊吾。而不知哈密之名亦古。元和志、伊州納職北有俱密山。是哈密因山得名、唐初已然。今三